

<書評>

吉原直樹著『「原発さまの町」からの脱却』 (岩波書店、2013年)と『絶望と希望』(作品社、2016年)

YOSHIHARA Naoki ; *Breakaway from the Town subordinated to Nuclear Power Plant and Despair and Hope*

今野裕昭

KONNO, Hiroaki

1. はじめに

2011年の3.11から2年半後の2013年11月に公表された『「原発さまの町」からの脱却』と5年後の2016年3月に公表された『絶望と希望』の2冊は、福島第一原発爆発の被災難民となった大熊町町民の避難先、他市町村における仮設住宅入居者たちの生活の推移を克明にフィールドワークしてきた吉原直樹によるモノグラフである。著者吉原自身が「オオクマについてのモノグラフとしてある」(『絶望と希望』:13頁)と位置づけているように、評者も、この2冊はセットになって、丹念なフィールドワークに基づく優れたモノグラフであると見る。

どちらの書もI部とII部からなっていて、I部ではオオクマの元住民(大熊町民)が置かれている客観的な状況が描き出され、II部においてオオクマの住民の状況をコミュニティの観点から捉え返す構成が取られている。方法的にその特徴を見ると、被災2年目と5年目という2冊構成で、コミュニティの変容に時間軸を取り込むことを可能にしている。また、コミュニティの観点から捉え返し内側から再定位する時に、そこで取られている手法は単なる経験主義的な帰納でもなく、あるいは行動主義的な仮説検証でもなく、吉原のいう「テーマを理論的なレベルから経験的なレベルへと練り上げる」(『モビリティと場所』2008年:はしがきii頁)方法が取られている。

吉原は感服するほどの碩学であるが、このモノグラフのベースにある社会学的な核は、『地域社会と地域住民組織』(1980年)、『戦後改革と地域住民組織』(1989年)、『アジアの地域住民組織』(2000年)、『防災コミュ

ニティの基層』(2011年a)に示された日本の町内会、地域コミュニティ、コミュニティの研究の蓄積の上に、M. カステル、D. ハーヴェイに精通し、その延長上にジョン・アリーのモビリティ・パラダイムを据えた、独自のコミュニティ論を構想している点にあるといえる。この理論的なレベルを経験的なレベルへと練り上げる相として、このオオクマのモノグラフが編み出されたと思われる。オオクマのこの2冊に示されたコミュニティ論の構想は、すでに『コミュニティ・スターデイズ』(2011年b)の中に描かれていたが、震災に遭遇して、オオクマという現場に即してより具体化・明確化されたといえる。

吉原は日本社会だけでなくインドネシアのバリ島の地域社会でも手堅い実証的な研究を出しているが、福島のこの2冊にも示されているモノグラファーとしての素養は、都市社会学のシカゴ学派の諸エスノグラフィーから直接影響を受けていると思われる。現在われわれが日本語で読むことができる『ゴールドコーストとスラム』の訳書(1997年)は、吉原たちの手になっている。

2. 2冊の著作の内容紹介

ここで、『「原発さまの町」からの脱却』(以下第1著作と記す)と『絶望と希望』(第2著作)の2冊の概要を、大熊町避難者たちがつくるコミュニティを基軸に置いて紹介する。

どちらも、I部で大熊町民が置かれている客観的・構造的な状況を描き、II部で大熊町民の状況をコミュニティの観点から捉え返し、そこに新しい人間関係のコミュニティが芽生えていることを描き出している。そして、2冊の最後の数章において、新しい人間関係のコミュニティに至るプロセスとその性格の理論化が図られ

表 二つのモノグラフの構成

著作の章立て	各章の内容	実証の主要ソース	モノグラフの構成	
第1著作Ⅰ部第1章	避難町民に分断がつくり出される要因：賠償、中間貯蔵施設の受入れ、除染の効果、災害公営住宅、復興ビジョン	開発主義の論理	大熊町民の外的状況の記述	
第2著作Ⅰ部第2章				大熊町復興計画検討委員会議事録、町民アンケート
第4章				みなし仮設避難者向けの町政懇談会の内部資料
第1章	裂け目／分断がつくり出されるプロセス／構造	区住民によるアンケート調査2カ所（1カ所は著者参画）		
第1著作Ⅰ部第2章	「帰らない意志」をもつ人びとの論理（開発主義批判）	調査票聞き取り調査、大熊町町民アンケート調査、聞き取り		
Ⅱ部第3章	原発関連の補助金漬けと消費主義化／私化が区会の共同性を破壊	福島県史、大熊町史、電力社史		
第1著作Ⅱ部第4章	Ⅱ部第3章	聞き取り、インタビュー、留置きアンケート調査		
第5章	仮設住宅の国策自治会	インタビュー、聞き取り、留置きアンケート調査	大熊町民のコミュニティの様態の記述	
第2著作Ⅱ部第5章	もうひとつの自治会：サロン「つながっぺ！おおくま」	インタビュー		
第6章	サロン：国策自治会の補完型コミュニティ	インタビュー、聞き取り		
Ⅰ部第3章	新自由主義的復興と日常生活者視点の中でのサロンの位置	福島県と大熊町の行政資料		
第1著作Ⅱ部第6章	町外みなし仮設住宅避難民の自発的な自治会（脱地域的コミュニティ）	留置きアンケート調査、聞き取り、インタビュー		
第2著作Ⅱ部第7章	ネットワーク型コミュニティ：「大熊町の明日を考える女性の会」	インタビュー		
第1著作Ⅰ部 終章	「対峙と対話」のコミュニティの中に生じている創発性の中の節合プロセスの抽出	大熊町住民意向調査、インタビュー	理論化	
第2著作Ⅱ部第8章	場所としてのコミュニティから帰属としてのコミュニティへの転換	—		
Ⅱ部 終章	希望：裂け目／分断を乗り越える動き	インタビュー、住民・支援者の資料		

第1著作：『「原発さまの町」からの脱却』（2013年）、第2著作：『絶望と希望』（2016年）

ている。その構成は、表〔二つのモノグラフの構成〕に整理したようになっている。以下、表に沿って概要を簡潔に述べる。

1) 大熊町民の外的状況の記述

吉原は、第1著作第1章と第2章で、行政関係の議事録や資料、町民アンケート調査結果、聞き取りから、賠償／補償、放射能除染の効果、避難指示区域の見直し、中間貯蔵施設建設の受け入れ、災害復興公営住宅、復興まちづくり・ビジョンといった一連の要因（出来事）が、町民の間にデバインド（裂け目）と分断／不和をつくり出し助長する原因となっていることを明らかにしている。さらに、第1著作の第4章で中間貯蔵施設建設の受

け入れを取りあげ、これが大熊町内でも地権者にあたる地区と非地権者の地区の住民間に分断をつくり出すプロセス（＝分断の構造）を、具体的に解明している。これら一連の要因の背後にあるのは、元の大熊町の地への帰還を前提とした、国一県一町の開発主義的な施策であるが、第2著作第1章で、行政の系に対峙している、元の地に「帰らない意志」をもつ人たちの立ち位置が、戦後日本の開発主義への生活者の視点からの批判的視座であることを明らかにしている。

2) 大熊町民のコミュニティの様態の記述

第1著作のⅡ部と第2著作のⅡ部はひと続きとなつて、外的状況の変化に対応して大熊町の避難者たちがど

のようなコミュニティをつくっているかを、時間を追って把握している。

まず、第1著作の第2章と第3章で、発災前にあった区会（地域コミュニティ）の共同性が、原発誘致後の補助金漬けと、所得が上がったことによる私化／消費主義化で、骨抜きになっていたことを示し、被災時すでに、地元区会は「あるけど、ない（＝機能していない）」コミュニティであったことを明らかにしている。区会の共同性を壊してきたものは、開発主義だった。

次いで第1著作第4章、第5章、第2著作第5章、第6章で、被災後会津若松市の仮設住宅に避難した人たちのコミュニティ形成の動きを詳しく検討、記述している。第1著作の第4章で、仮設住宅の中につくられた自治会が、国一町の系列を通して上からつくられた「国策自治会」であることを明らかにし、第5章で国策自治会の補完型コミュニティとして、もう一つの自治会としての「サロン」が、社会福祉協議会系列の働きかけでつくられていることを明らかにしている。そして、第2著作の第5章では、F自治会のサロンの具体的な分析を通して、仮設の外部からの支援者など異質な者をも含む新しい協同的な社会関係が創発性の中に生まれているが、集団レベルでの相互作用を通して構造を変えてゆく「節合」のプロセスにはまだ至っていないことを明らかにし、サロンが行政との「対峙」と「対話」の機能をもって中間集団の役割を果たしていることを示している。続く第6章は、新自由主義的方向での単線的な開発主義の現在進められている復興と、これに対峙する日常生活者視点からの復興を対比検討しているが、異質な者が出逢うサロンの対話の場を後者の視点からの系に位置づけている。

このほかに、大熊町避難民の間には脱地域的なコミュニティが生まれてきている。第2著作第3章で、県内各地の民間住宅のみなし仮設に入っている人たちの有志が立ち上げた「自発的な自治会」を取りあげ、これが脱地域的な日常的に往き来する交友関係を基礎とするコミュニティであることを明らかにしている。加えて第1著作の第6章で、組織として定型的な形を取らないネットワーク型コミュニティである「大熊町の明日を考える女性の会」を取りあげ、新たなコミュニティの形を見出している。「女性の会」は避難民の声を広範囲に聞きながら、補償や被爆者の健康管理・医療、帰還問題など抱える課題を、国一県一町に提言という形で打ち出している。

以上のように、発災前の「区会」、仮設住宅の中の

「国策自治会」、「サロン」、みなし仮設住宅入居者たちの「自発的な自治会」、ネットワーク型の新しいタイプの「女性の会」という、これまでに出現したコミュニティの様態を検討することを通して、大熊町の避難民は、発災後、それまでのコミュニティの関係性や集合性を対自化し、自分たちが置かれた状況を避難者相互に確認し合い、被災生活の悩みを語り合い共に活動する中で、新たな関係や集合性を生み出しつつあることを明らかにしている。

3) 理論化

第2著作第7章と第1著作終章および第2著作の第8章、第9章で、これまで記述してきた大熊町民のコミュニティの様態を踏まえて、創発性の中の新しいコミュニティがどのようにつくられるか、および、新しいコミュニティの特性を理論化している。

発災以来移動と流動の中にある大熊町民が、行政との「対峙」と「対話」を自分たちのコミュニティの中に埋め込む必要から新たに生み出してきた地縁的「サロン」やネットワーク型コミュニティが、地域性から関係の次元のネットワークへ、他者に対して閉じられた共同性から開かれた協働へ、集団から状況へと転換するタイプのものであることを見出し、土地という固定的なものから流動的なものへとシフトする「帰属としてのコミュニティ」への転換にあることを確認している。さらに、流動する新しいコミュニティの中に、異なる他者との出逢いの中でよそ者の眼をとり込み、自分たちの思いがよそ者に伝わる相互作用の中で状況（構造）を変えてゆく創発性の中の「接合」のプロセスが生じ、これが帰属としてのコミュニティへの転換をつくり出すという、移動と流動という優れて現代の時代の中での新しいコミュニティの生成の理論、コミュニティ変動論を同定している。

最後に第2著作終章で、中間貯蔵施設建設の用地買収をめぐる、行政側の専門知と住民生活の民衆知／経験知とが対峙する間の媒介空間に生まれた二つの団体、「中間貯蔵施設地権者会」とNPO法人「大熊町ふるさと応援団」の活動を紹介している。被災者の生活の実相から立ち現われる「地域専門知」の立場から、前者の団体が地権者間での情報の共有を目指し、後者が行政の上からの専門知に対峙して外部からの眼による検証を可能にするために、行政専門知の相対化を目指す活動を行っている。著者はここに町民間の分断を乗り越える「希望」を託している。

以上のような構成をとっているこの2冊のモノグラフは、『コミュニティ・スタディーズ』の中で構想されていたコミュニティ再生・生成の理論を、大熊町避難民の日常営為という経験レベルを潜らせ、経験レベルの論理を踏まえて同定した理論へと練り上げている試みであると捉えられる。

3. 吉原のモノグラフの方法上の特徴

吉原のモノグラフには、インタビュー（聞き取り）調査と、全体を捉えるためのアンケート調査に加えて、分厚いドキュメント分析が見られ、フィールドワークの手法のすべてを駆使している点に方法上の特徴が見られる。

先ほどの表〔二つのモノグラフの構成〕の「実証の主要ソース欄」に整理したように、いくつもの章で、聞き取りをし、団体グループに悉皆でアンケート調査（留め置き）を掛け、さらにヒアリングを掛けるという手法を駆使している。さらに、調査票を使ったヒアリング（面接調査）も使われていて、ここからアンケートを重視するという手法が吉原のフィールドワークの特徴であるともいえる。

ドキュメント分析について見ると、県史、町史、電力社史のみならず、議会議事録、行政の委員会議事録、行政の内部資料など、徹底的なデータ収集に基づくドキュメント分析の力量が示されている。吉原のモノグラフから感じ取れるのは、執拗なまでに文書データを集める貪欲な姿勢である。何を知りたいか狙いがはっきりしていて、どこに行けば入手できるのか、フィールドワーカーとしての勤が働く調査者の資質の豊かさを見てとれる。

さらに、モノグラフから読み取れる吉原の大熊町民の営為を捉えるスタンスは、グラスルーツの大熊町民の視座に立って国の動きまでを射程に捉えるところにあるが、この視座のとり方は、『地域社会と地域住民組織』の当初から一貫した吉原の立ち位置である。

4. 2冊の著作に寄せて

すでに見てきたように、大熊町民は災害に直面した人たちであるがゆえに、社会の制度のもつ欠陥にもろに直面し、生活者として必要なものがはっきりとしかも急速に見えてくる状況の中に置かれている。町民が自分が必要なものを周囲の人びとと確かめ合い、それを声に出してゆく行為が自然と出てくる中で、それを妨げる社会の作用をこの2冊のモノグラフは丹念に捉えているとともに、これを乗り越えようとする人びとの協同の営為の中

に新しいコミュニティの生成を見い出している。事態が急速に展開する中に在りながら、著者のフィールドワーカーとしての鋭い観察力と分析力が発揮されていることが、モノグラフの随所に感じ取れる。たとえば、「帰らない宣言」をした全国に避難している上野一区住民が運動の底流としているものの一つに、健康管理手帳の作成および配布があるが、この活動を単に女性の会や大熊町町政研究会の活動として記述するに留めることなく、第2著作第7章で、これが既存の区会や国策自治会の「地域性」や「共同性」の枠組みからは出て来ないことを分析している。こうした鋭い分析は、第1著作の第4章と第5章で、官製自治会の活動を地域性と活動の範囲から丹念に見極め、これをサロンやネットワークの地域性と協働性（活動範囲）と比べる上に成り立っているが、評者は、そこに著者の視点の確かさと観察の鋭さを感じ取る。

このように、2冊はたいへん質の良いモノグラフであるが、あえて難点をいえば、区会が3.11の発災以前にすでに「あるけど、ない」コミュニティになったプロセスを、もう少し具体的に描き出すことはできないかという物足りなさを感じる。

原発の補助金漬けと生活の私化が進んでいたのも、コミュニティは形骸化していたという説明はあるが、この部分でさらに、具体的に「あったコミュニティ」がどう侵食されてきたのかを描き出すこともできると思うし、それ以上に、発災の時点でもまだ地縁系のコミュニティは、農業生産を基礎に相対的にとはいえしっかりあったのでは、という疑義が残るように思う。

たとえば、「大熊町町政研究会」の主催者が賛同者を募って、帰らない人への支援を町に求める「帰らない宣言」を出した時、主催者K氏は「区長だったので区長会に宣言を提起した。しかし、賛同されず、仮設住宅の中につくられた自治会をベースに宣言した」（第2著作：192頁）というが、これは区会—自治会の系が、住民全体に関わることにに関して発災直後まだ力（拘束力）をもっていったということを意味しないだろうか。ここには、区会を手段として用いるという意図と同時に、了承を取らないとやりづらい（うまく動かない）という両面があるように思われ、当時まだ区会が機能していたことを想起させる。

遡って歴史的に原発に取り込まれてきた過程についても、原発導入で地域につくられた分厚い便益体制が地元民の私化を広げ、「生活の共同」の枠組みを消滅させる、と説明されているが（第1著作：95～96頁）、生活

の私化／消費主義化と部落組織の形骸化との関係が、いま一つ具体的に浮かび上がってこない。第1著作の58頁で『大熊町史』を引用して、「部落組織が第二次大戦以前に旧来のもの（＝生活の共同の枠組み、筆者）を細分化し、行政の下部構造化して改組している・・・つまり、部落組織が担保してきた強固な集落意識が風化している」と指摘しているが、これと戦後の「あるけど、ない」コミュニティへの後退とは、つながりが見えない。戦後について、原発立地による兼業化の進行が触れられ（第1著作：65-66頁）、消費拡大につながったことは指摘されているが、そこでも部落組織（区会）は所与のものとして部落解体への具体的な説明はない。部落組織の崩壊と原発立地後の生活の私化、消費主義化とは並行したままで、全体像がなお見えてこない。すでに町内会史を研究してきた吉原には、『コミュニティ・スタディーズ』の中で町内会・自治会の歴史の中に地縁系コミュニティの衰退を総括もして、部落組織の分解は所与のものかもしれない。しかし、大熊町民のモノグラフであるのだから、この点に関しても大熊町に即した記述が欲しいと思う。消費主義化が、農家一戸一戸の自立と部落組織の空洞化にどう結びついていたのかは検討される余地があるのではないだろうか。いずれにしても、地域コミュニティの中で、農業生産場面でのさまざまな集団の重畳的な累積状況の中に維持されるコミュニティは、もう少し強固なものではないのだろうか。むしろ、これを一瞬にして断絶した福島第一原発の爆発こそが、破壊的なものだったのではないだろうか。

最後に、この2つのモノグラフのよい点をもう一つ挙げておきたい。吉原自身も時間軸を入れることの必要性を「時間的モーメントの組み込み」（第2著作：195頁）

という言葉で指摘しているが、このモノグラフは、時間軸の中で見る（歴史的に流れの中に捉える）ことが変容の本質をつかまえることになることを見事に示している。10年、20年後に同じ地域を再調査しているエスノグラフィアーは、リンド夫妻の『ミドルタウン』（1929年）と『変貌するミドルタウン』（1937年）や社会人類学者レイモンド・ファースの『我らティコピア』（1936年）と『ティコピアの社会変化』（1959年）など有名なものはいくつかあるが、吉原のモノグラフは災害という危機的な事象、矛盾が一気に表出する危機的な事象を対象にしているがゆえに、短時間のうちに社会の本質が顔を出してきていることが見えるし、時間軸の組み込みが変化のプロセスを実証的に観察できることのメリットをはっきりと示してくれている。

文献

- 吉原直樹2016『絶望と希望—福島・被災者とコミュニティ—』作品社。
- 吉原直樹2013『「原発さまの町」からの脱却—大熊町から考えるコミュニティの未来—』岩波書店。
- 吉原直樹編著2011a『防災コミュニティの基層—東北6都市の町内会分析—』御茶の水書房。
- 吉原直樹2011b『コミュニティ・スタディーズ』作品社。
- 吉原直樹2008『モビリティと場所—21世紀都市空間の転回—』東京大学出版会。
- 吉原直樹2000『アジアの地域住民組織—町内会・街坊会・RT/RW—』御茶の水書房。
- 吉原直樹1989『戦後改革と地域住民組織—占領下の都市町内会—』ミネルヴァ書房。
- 吉原直樹1980『地域社会と地域住民組織—戦後自治会への一視点—』八千代出版。